作家・演出家・俳優

松尾スズキ
SUZUKI MATSUO

作品は更新しながら生き続ける。

差別や暴力など過激な表現で社会の不平等を斬りながら、観た人の心に美しい衝撃を残す。宮藤官九郎、阿部サダヲら個性と人気を併せ持つ面々が所属する大人計画の主宰であり、鬼才と呼ばれる作・演出家、松尾スズキ。その傑作のひとつ『マシーン日記』が、シアターイーストで12年ぶりに上演される。

―― 『マシーン日記』は96年～98年、01年と上演を重ね、その度に大きな話題と高い評価を集めて、いまや伝説的な作品という位置付けです。今回、東京芸術劇場から新たなキャストで上演を、というオファーを引き受けられた理由は？

最後の再々演から時間が経っているんですけど、やらないと決めていたわけではないんです。むしろ、時代に左右されない普遍的な作品だと思うので、またいつかやりたいと思っていました。やっぱり、わかりやすい作品なんですよね。もともと劇団外公演のために書いた戯曲だったので、大人計画用に書くものより、言葉を少しパブリックに開いてあるというか。ストーリーもわりと単純で、ひとりひとりのキャラが立っているし、それぞれの物語も完結していますから。

―― とは言え、登場人物の関係の濃密さは、常識を大きくはみ出します。

とにかく恋愛という名のバトルを書きたかったんです。単純な暴力性だけではなくて、心身ともに常に戦っているような。小さな町工場で、誰にも知られずその戦いが密度を増していって、それが町全体にドーンと飛び火していく。ひとつの家族の中で蓄積されて貯まった毒ガス的なものが爆発して、ビッグバンじゃないけど小宇宙ぐらいにはなる。そういうものを考えてつくりました。

―― キャストについてですが、01年版は松尾さんご自身と阿部さんが兄弟を演じられましたし、作品そのものが伝説化していますから、新キャストのプレッシャーはかなりのものだと思いますが。

そこは特に、うちの劇団員である少路(勇介)君に頑張ってもらおうと思っています。鍛えて鍛えて鍛えますよ。とにかく不器用なヤツなので(笑)。でも、彼が持っている訳のわからなさ、ひたむき過ぎて狂気が感じられるようなところは、大人計画の他の役者にはないものなので、そこに賭けてみようと。劇団に10年くらいいるんですが、本人もおそらく、自分なりの居場所をつかもうとしている段階だと思うんです。それを『マシーン日記』で完全につかんでほしいと思っています。

―― その少路さんが弟で、彼が犯した罪を償いつつ、独自のやり方で弟を罰している兄がいる。兄を演じるオクイシュージさんは、この数年、松尾さんのほとんどの舞台で重要な役を演じていらっしゃいます。

何か信用できるんです、彼の演技って。「こういう振り切れ方をしてほしい」「こういう抑え方をしてほしい」という匙加減が、自分の生理にとても近いので、演出していてすごく気持ちがいいんですよね。それは彼が僕の真似をしているわけではなく、持って生まれた身体性への興味だと思うんですが、そこがすごく僕と近いんでしょうね。

―― 兄弟と抜き差しならない関係にあるふたりの女性も、女優さんにとっては相当ハードルが高い役だと思います。

特に峯村リエさんが演じる元・女教師は、過去の公演ですべて片桐はいりさんが演じていますからね。でもいつかは誰かが引き継がないと。作品は更新しながら生き続けていくものですから。その点、峯村さんになら任せられる。もうひとりの鈴木杏さんは初めてご一緒するんですが、ブレないというか、芯のある女優さんですね。そして、僕の芝居のことを好いてくれている。彼女は今、映像と舞台を半々くらいでやっていると思いますが、いわゆる芸能人の女優で、僕の世界観をちゃんと理解して、積極的にやってくれる人はそうそういない。舞台を観に来て「出してくださいよー」と言う人はよくいますけど、いざ依頼すると「怖い」とか言って引っ込むんです。でも鈴木さんは、むしろあちらから来てくれる。それは一緒にやるベースとして、ものすごく大切です。

―― この作品は、東京芸術劇場での上演のあと、フランス公演を予定しています。松尾作品にとって、初の海外公演になりますね。

以前、ドイツで朗読されたらしいんです、『マシーン日記』。どんな反響だったのか、まったく伝わってきていないんですけど(笑)。作品そのものは、もう何度も上演して、見えてくる世界などに自信がないことはないんですが、翻訳でどれだけのニュアンスが伝わるかという不安は、どうしてもありますね。自分も同行しますから、そこは肌で確かめてきたいと思います。

取材・構成：徳永京子

恋愛という名のバトルが描きたかった。

まつお・すずき　1988年「大人計画」を旗揚げ。劇団公演の作・演出を務め、俳優としても出演。97年には『ファンキー！　～宇宙は見える所までしかない～』で第41回岸田國士戯曲賞を、2001年には第38回ゴールデンアロー賞を受賞。最近の主な舞台は10年『農業少女』(演出)、11年『欲望という名の電車』(演出)、12年『ウェルカム・ニッポン』(作・演出・出演)、12年『ふくすけ』(作・演出・出演)、『生きちゃってどうすんだ』(作・演出・出演)などがある。演劇界のほかにも、映画監督、俳優として映画やTVドラマへの出演、小説・エッセイの執筆などその才能は多岐にわたり、各界で第一線のクリエイターとして活躍している。

東京芸術劇場リニューアル記念　マシーン日記　'13年1月19日[土]発売開始

'13年3月14日[木]～3月31日[日]　シアターイーストで

作・演出：松尾スズキ

出演：鈴木 杏／少路勇介／オクイシュージ／峯村リエ

チケット料金　一般：5,500円／※65歳以上：3,500円／※25歳以下：3,000円／※高校生割引：1,000円　※前売のみ・枚数限定・要証明書

お問合せ　東京芸術劇場ボックスオフィス 03-5391-3010

3月	14 木	15 金	16 土	17 日	18 月	19 火	20 水祝	21 木	22 金	23 土	24 日	25 月	26 火	27 水	28 木	29 金	30 土	31 日
14:00			●	●	休		●			◎	●	休		●			●	●
19:00	●	●	●		演	●	●	●	●	●		演	●	●	●	●	●	

◎＝視覚障害者のための「舞台説明会」、聴覚障害者のための「ポータブル字幕機提供」を実施いたします(要予約)

主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都／東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

鈴木 杏

少路勇介

オクイシュージ

峯村リエ